



「老犬になったから」と持ち込まれ、処分を待つポメラニアン
Old Pomeranian given up by owner as too troublesome to care for.

1997年の春、当時勤めていた会社の近くの線路脇で、水色のゴミ袋に入れられ「犬(死)」と貼り紙された白い犬の遺体を見つけ、その子の亡骸を近くの河川敷に埋葬しました。その時、「家族の一員であるはずの犬の命をゴミ同様に捨ててしまう人がいる。これが日本の現実なんだ」と強く感じるとともに、「写真や文章を通じて、言葉を持たない彼らのメッセージを伝えたい」と考え始めました。そして、その年の夏、関西のとある動物収容施設を訪れ、飼い主に捨てられ殺処分される運命にある犬猫たちの最期の肖像を写真に収め、翌年の春から、「どうぶつたちへのレクイエム」と題して全国で巡回展示を始めました。

それから6年の間に、各地で写真展や講演会を開いていただけになりました。そんな中で、幾度か地元の動物収容施設を取材させていただきました。今回は、その取材の中で強く印象に残っている出来事について、お話しさせていただきますと思います。

中国地方のとある保健所を取材した時のことです。そこでは月に数度、「不用になった子猫の引き取り日」が決められており、引き取りを希望する市民が、所定の時間内に、保健所まで猫を連れてくることになっていました。引き取り開始の朝10時、1人また1人と、段ボール箱を抱えた人たちが入ってきます。箱

をして猫の入った箱を置き、平然と立ち去っていきます。引き取られた猫は、職員によって、即座に麻袋の中に放り込まれていきます。

「その子猫、どうしたんですか?」。ある主婦に聞いてみました。「うちの猫が産んだけど飼えないし、もらってくれる人もいないから」とその女性。「親猫に不妊手術を受けさせた方がいいんじゃないですか?」との問いに「でも、手術するのかわいそうだし……」との答え。「でも、この子猫たちは、これからガス室の中で苦しみながら死んで行くんですよ。それはかわいそうじゃないんですか?」。なんとか思い直してほしいと必死で語りかけてみましたが、「そう言われても……」と言葉を濁し、主婦は足早に去って行きました。最後にふともらした「手術はお金がかかるし……」の言葉。どうやらそれが本音のようでした。その日だけで、約60匹の子猫が持ち込まれました。

同じ保健所に、犬が持ち込まれました。荷台に2個の犬小屋が積まれた軽トラックが、保健所の駐車場に到着しました。軽トラを運転していたのは保健所の職員。飼い主の依頼で、家まで犬を引き取りに行ったようです。助手席には飼い主らしき初老の男性が。荷台の小屋の1つに、2頭の白い犬が入っていました。犬たちは職員によってリードで引きずり降ろされました。尻尾は垂れて後ろ足の

の中には大抵、子猫が4~5匹。持ち込む人たちの顔ぶれは様々です。10代の若い女性、主婦、サラリーマン風の人、学校の先生、警察官……。「飼い猫が子猫を産んだから」「野良猫が自分の家の庭で出産したから」「学校の前に子猫が捨てられていたから」。……皆それぞれの理由を告げ、書類にサイン

間に挟み込まれています。耳をふせ足をすくませ、ブルブル震えながら収容棟へと引っ張られて行き、檻に入れられた途端、切ない声で激しく鳴き始めました。その一部始終を見聞きしていたその男性はというと、顔色一つ変えず、平然と書類にサインをしています。書類には犬の名前を書く欄があります。その欄が空白になっていたのも、私は「犬の名前は何かですか?」とたずねました。すると「ない」と一言。聞けば1頭は3年、もう1頭は6年も飼っていたといえます。不用になった理由としては、「自分が腰が悪くなって散歩が大変だから」「他に散歩して下さるご家族はおられないんですか?」とたずねると、「いや、女房がいるけど……」と曖昧な返事。その後、処分の方法を伝え、里親探しはできないのかと説得を試みたものの彼の心は全く動かず、「手続きが終わったんだから、もう帰ってもいいだろう」と言わんばかりに家路につきました。

東海地方のある施設を訪れた時のこと。中年の女性が、キャリーバックに入ったポメラニアンを持ち込みました。バッグの上には、きれいなスカーフが巻かれていました。犬は10歳を越えた老犬でした。収容棟の檻の一角に置かれたその子は、バッグの中でガタガタ震えながら怯えた瞳でこちらを見上げています。職員の人に事情を聞くと、「老犬の最期を看取るのがいやなんでしょう。そういう人は多いですよ。悲しい思いをしたくないとか、病気になるお金と手間がかかるとかという理由で、処分してくれと連れて来るんです」。その施設での処分方法も、他の多くの施設がそうであるように、二酸化炭素ガスによる窒息死でした。そこで処分を担当している職員の方が、私の写真展に来て下さいました。そして、日頃の思いについて語って下さいました。「国からの通達では、ガスでの処分を安楽死と認めているんです。でも、自分が見ている限り、そうは思えない。ガスを注入し始めると、中でボタンボタン暴れたりもがいたりしている様子があるし、叫び声も聞こえます。でも自分が入ったわけではないので本当に苦しいのかどうか証明できない。もしも安楽でないという根拠や証拠があれば、もちろん安楽な方法に切り替えていきたい気持ちはある。でも、このガス殺システムには莫大な経費がかかっているの、よほどの理